

「ウィーンの謝肉祭の道化」、ライブでは初めて、詳細なニュアンスを教えて貰える楽しみ。「アレグロ」、カーニヴァルを迎える人々の生活それぞれ、そんなイメージを連想。当初の旋律が何度もリフレイン、聞こえてくるパレードの音楽、「展覧会の絵」のプロムナード効果。皆が我を忘れて多数派に与する訳でなし、偶然または必然はたまた日常性、悲喜こもごもの小話々々。3つ目のエピソードの終わりの和音、鮮烈クリアー撃、余韻なしの絶対性。「ロマンス」、30小節足らずの小曲なれど、曲想通り非常にゆっくりとしたテンポ。きコンセントレーション、深い音の出し入れがクローズアップ、ハッとする浮き沈み。引き込まれ傾聴、説得力あるキレイサの浮き上がり、爽やかな納得、作品133の「朝の歌」も聴いてみたい衝動。「フィナーレ」、謝肉祭モードへの復帰、細やかな描写、何から何まで賑やかで喧騒、中間部スラーそのものの上昇下降、クルリクルリ前回りのからくり人形、収まりを目指し。予想外の美しさの際立ち、演奏家の工夫に感心。

モーツアルトの「ピアノソナタ15番」、演奏前のトーク、イジっても構わないので、そうしますとのアナウンス。軽快なハイスピード疾風にないにせよ、ウィーン情緒を盛り込んだ演奏を想定していた旨一瞬ギリ。そう、昔グルダさんの録音、フットワーク軽く装飾音ウジャウジャ、面白がって聴いた思い出。さて、鬼が出るか蛇が出るか、半ばオッカナビックリ、でも、実際は真摯な遊び心。1楽章の終わり近く、覚醒の和音にビックリ。2楽章、スタッカートが基本リズム、後半はテヌートを利かす、木管楽器を模してとのこと、これもアリとすんなり受け入れ。

ウィーンゆかりの作曲家、マーラーさんやシェーンベルクさんと仲間たち、興味津々好奇心、理解し難い怖いもの見たさ。ボルトキエヴィッチさんの練習曲は初めて、最初はスクリーパービンの初期の作品の様、お化けが出そうで出てこない。J.シュトラウスは年末年始のコンサート・プログラム、華やかなモノ苦手な私にはBGM的。R.シュトラウスとは、ヴァイオリン・ソナタを通してのみ。不勉強、知らないこと多過ぎ。(2012.12.10)

シューマン：ウィーンの謝肉祭の道化 Op.26

モーツアルト：ピアノソナタ 15番 ハ長調 K.545

ボルトキエヴィッチ：練習曲 変ニ長調 Op.15-8、嬰ヘ短調 Op.15-9

J.シュトラウス・グリュンフェルト：

ウィーンの夜会（「こうもり」などのワルツによるコンサートパラフレーズ）

R.シュトラウス－O.ジンガー：薔薇の騎士からコンサートワルツ

（アンコール）

シューマン：「子供の情景」より「トロイメライ」

